# ミナゴロシ

# プロローグ

入江美幸は、逃げ続けていた。

午前中なのに薄暗い高校の廊下。窓の外は今にも雨が降りだしそうな空模様だった。周囲に人の気配はなく、自分が鳴らす上履きの足音だけが響いている。乱れる息を整える暇もなく、全速力で走り続けていた。

足を止めずに振り返ると、廊下の遠くで炎のようにぼんやりと赤く灯るものが見える。それは風になびくように揺れながら、徐々に大きくなっていく。いや、巨大化しているわけではない。こちらへと向かって来ているのだ。それは、明確な意思を持って美幸を追いかけていた。

誰もいないと、これほど冷たく寂しいものなのか。見なれているはずの校舎がまるで廃墟のように感じられる。廊下の先に昇降口が見えたが、美幸は校舎から出ずに駆け抜ける。そして脇の階段を一段飛ばしで上りはじめた。

「どうして、こんなことに……」

息が詰まり上を向いてあえぐ。なぜか体力が続かない。好きではないが体育のマラソンもこなしているし、上手ではないがバスケ部にも所属している。そんな自分がどうしてこんなに疲れてしまうのか。心と体の乖離に焦りを覚える。気温や湿度が高いのか。喉が渇いているのか。なぜか周囲の酸素が薄いのか。違う、脅えているからだ。恐怖が体力を削り取っているのだ。

「誰か……誰か助けて！」

かすれた声がむなしく廊下に響く。何度叫んでも、どこからも声は返ってこなかった。

「何なの？　あれは何だったの？」

誰もいない校舎の中、一階の廊下の隅にそれは立っていた。棒立ちで、うつむいて。普通なら怪しくて近寄るはずもなかったが、この状況では声をかけるしかなかった。あのう、と間延びした声で呼びかけた。するとその声に反応して、あいつは静かに顔を上げた——

「あっ」

階段で目測を誤り、軽くつまずく。足を踏ん張って何とか持ちこたえた。美幸は何もないところでもつまずくんだな、という恋人の声が頭に響く。それすらも、もう遠い昔の思い出のような気がして胸が詰まった。両手で両膝をつかんで、嗚咽のような息をはく。床に落ちた水滴が汗なのか涎なのか、涙なのかも分からなかった。

ぞくりと、背中を撫でられたような気配を感じて振り返る。



赤いコートに白い仮面、巨大な鎌を持ったあいつが、階段の下から真っ黒な目でこちらを見上げていた。

「い、いやあぁ！」

なけなしの気力を振り絞って階段を駆け上がる。いつの間にか、足音も立てずにあいつが近づいていた。二階の階段を上がって三階へ着くと、そのまま長く伸びる廊下を再び走りだした。逃げなければ、でもどこへ逃げればいいのか。このまま校舎内を走り回るしかないのか。

「私が、何を、したって、言うの？　何で、こんな目に、遭うの？」

途切れ途切れの声を上げながら頭を振る。もし自分の失敗によって引き起こされた事態ならば後悔もするだろう。もし自分の悪意によって引き起こされた事態ならば反省もするだろう。だが美幸には全く原因が思いあたらない。だからこの状況は純粋に恐怖でしかなかった。

「どこかに隠れないと、このままじゃ……」

廊下の突きあたりに広い教室の引き戸が見える。ここは何の教室だったか。じれったく引手に指をかけると、がらりと戸が横にスライドした。中に飛び込んで鍵をかければ助かるかもしれない。

「痛っ」

だが教室に入る直前で右足に痛みを感じて廊下に転がった。すぐさま立ち上がろうとしたが、体が動かず前のめりに倒れた。硬く冷たい床に顎を打ち、目の前に火花が飛ぶ。足を攣ったのか、

捻ったのか。確かめている暇もない。両手で体を持ち上げて、右足を一歩前に出した。
臑から先がなくなり、血が噴きだしていた。
「え……ええ！」
そのまま膝から床に崩れ落ちる。激痛が全身を走り抜けた。体をねじって背後を見ると、隅の方に足首だけが落ちている。足を切断された。とてつもない絶望感に体がガタガタと震える。広がる血だまりは赤いコートの裾と交わっている。顔を上げると、大鎌をさげたあいつがこちらを見下ろしていた。
「やめて……お願い……」
廊下に腰を落としたまま後ずさる。白い仮面の奥からは何の反応も見られない。人形のように硬い動きで近づき、血のついた大鎌をゆっくりと振り上げる。これは悪い夢に違いない。こんなことが現実に起きるはずがない。痛みと、恐怖と、絶望に涙があふれる。視界がぼやけて、あいつの姿も曖昧になる。
ふと、目の前の光景に既視感を覚えた。
「まさか、あなたは……」
美幸の唇がかすかに震える。だが記憶から探りだすよりも早く、死神の大鎌が振り下ろされた。

## ミナゴロシ

椙本孝思

# 1

裏野新太は、目を覚ました。

やけに高く白い天井に、明かりの消えた蛍光灯が並んでいる。あたりは早朝のように薄暗く、深夜よりも静寂に包まれていた。息をすると、重く冷たい冬の空気が鼻の奥に流れこむ。何か夢を見ていたような気もするが、何も思いだせない。大きな溜息をつきつつ再び目を閉じると、横向きに寝返りを打った。

「冷たっ」

頬の違和感に目を開ける。思いがけず冷たい感触に肌が驚いた。目の前には滑らかな艶を帯びた灰色の床が広がっている。布団に寝ているわけではないと、ようやく気がついた。

「何だ？　ここは……」

遠くには黒い脚を持ったテーブルのようなものが見える。どこかで見たような気もするが、思いだせない。気持ちが落ち着くにつれて奇妙な感覚がさらに強くなってきた。体を起こして立ち上がると、体内の血液がさあっと下がるような感覚を覚えた。

広い部屋だった。正面に深緑色の黒板がある。黒い脚のテーブルだと思ったものは、部屋の左隅に置かれたグランドピアノだった。振り返った背後には長机の列が続き、奥の壁にはやや小さな黒板がある。左右には広い窓が並び、両側に分厚いカーテンが束ねられていた。

「音楽室じゃないか」

裏野は拍子抜けしたような声でつぶやく。見覚えがないと思った奇妙な空間は、よく見れば自分が通っている学校、県立庵谷高校の三階にある音楽室だった。頭を下げると紺色のブレザーを着た自分の体が見える。校内にいるのだから当然制服を身に着けていた。

「俺、何でこんな所で寝てんだよ」

誰もいない音楽室で自嘲めいた笑みがこぼれる。どうしてこうなったのか、いまいちはっきりと思いだせないのが気持ち悪かった。壁に掲げられた時計の針は、午後三時を回っている。窓から見える空は灰色の雲に覆われている。他の教室はまだ授業中らしく、生徒たちの喧噪も聞こえてはこなかった。

「あれ？　まずいんじゃないか、俺」

状況が分かると次第に焦りがわき起こる。何があったのかはよく思いだせないが、授業中にこんな場所にいるのはおかしい。保健室ならまだしも、音楽室で寝ていては単にさぼっているのと同じ

だろう。突発的な危機感に体が震える。先生から、裏野はどこへ行ったんだとか言われているだろうか。いっそ今は教室に戻らない方が得策だろうが、それでもここにいるわけにはいかない。音楽科の先生や他の先生に見つかる危険があった。

「どうせ隠れるなら、屋上階段へ行った方がいいな」

音楽室は三階にあり、すぐ近くの階段を上がると屋上に出られる鉄扉がある。ただし屋上は侵入禁止となっており、鉄扉も普段は施錠されていた。しかしそれだけに屋上への階段を上がる者はおらず、鉄扉の前は格好の隠れ場所となっていた。裏野は半分だけ開いた音楽室の引き戸を目指して歩きだす。周囲には教科書もカバンもなく、自分は全くの手ぶらだった。ますます事情が見えない。本当に何をやっていたのだろうか。引き戸の向こうには長く続く廊下が見えて、やはり生徒や先生の姿はない。物音一つ聞こえてこないことを確認してから、がらりと大きく戸を開いた。

足下に、血まみれの女子生徒が横たわっていた。

## 2

裏野は思わず体を震わせる。無意識の反射行動に足がよろめいた。



「何だ……どういうことだ？」

学校で、校舎内で女が血を流して倒れている。視線を何度も行き来させながら、見間違いではないと確認した。女は仰向けになって裏野を逆さまに見上げている。大きく開いた目は瞬きもせず、ぽかんと開けた口の端からは血が流れ落ちている。そして、左の鎖骨あたりから胸の下まで制服が裂け、血に染まっていた。

「女が、死んでいるのか？」

眼下の状況が信じられない。一瞬、よくできたマネキン人形のように見えたのは、それだけ現実感がなく女も微動だにしなかったからだろう。だが、女が生身の人間であるのは間違いない。鋭利な刃物で切りつけられたかのような傷は深く大きく、廊下に流れた血もすでに乾き始めている。右足は膝の辺りで失われ、やや離れたところには革靴を履いた血みどろの足首が落ちている。あまりにも凄惨な状況に手を触れることすら憚られた。

「誰だよ、こいつ……」

女には全く見覚えがない。それどころか身に着けている制服までもこの学校のものとは異なっていた。裏野は学校指定の白いワイシャツにネクタイ、紺色のブレザーにグレーのズボンを着ている。女子生徒の場合はネクタイの代わりにリボンとなり、ズボンの代わりにスカートを穿いているはずだった。

しかしこの女はそれとは似ても似つかない、赤茶色のブレザーとベージュのスカートを身に着けている。血で染まったわけでもなければ、私服にも見えない。恐らくは別の学校の制服なのだろう。

「他の学校の奴が、なんでうちの学校で死んでいるんだ？」

しかもただ死んでいるのではない。何者かに切りつけられて、殺されているのだ。

「とにかく、先生に伝えないと」

死体がそのまま置かれているということは、まだ誰にも知られていないのだろう。授業をさぼっているので目立ちたくはないが、こんな状況を放っておくわけにもいかない。裏野は廊下の端を歩いて死体をかわすと、やや早足になって教室へと向かった。三階には三年生の教室が並んでいる。二年生の自分は先生にも生徒にもなじみはないが、そんなことを言っている場合ではなかった。

「あれ、いない……」

一番近い三年F組の教室を窓から覗くが、中に人の姿はない。机や椅子が並んだ寂しげな室内だけが目に入った。体育の授業か理科の実験か、移動教室の授業だろうか。隣のE組を覗いても誰もいない。さらに隣のD組までもが無人だった。

「これは……何だ？」

廊下を横切って運動場へと目を向ける。雲に覆われた暗い空の下に、茶色い土の敷地が広がっている。そこにも人の姿はない。体操服の生徒たちも、ジャージ姿の体育教師もいない。当然、かけ



声ひとつ届いてはこなかった。

「誰もいないのか？　生徒も先生も？」

静かなのは授業中だからではなく、誰もいないからだった。通りかかった美術室を開けてもひっそりとしており、隣の準備室を覗いても美術教師の姿はない。顔を戻して廊下を見ても、人の気配すら感じられない。だが振り返ると、遠くに女の死体が転がっていた。

「何が起きているんだよ、これ……」

焦りは次第に不安へと変わり、やがて得体のしれない恐怖を呼び覚ます。自分がおかしくなったのではない。自分以外がおかしくなっているのだとようやく気づきはじめていた。

## 3

何かのきっかけで、大きな勘違いや誤解が生じることがある。

たとえば数学のテスト中、何度もこなしてきたはずの証明問題が急に解けなくなる。大体は問題文の読み間違いによるものだが、気持ちが焦ると無駄に時間を費やしてしまうばかりか、その後の問題までも手が動かなくなってしまう。いわゆる『本番に弱い』という現象だ。

あるいは友達同士の会話の中で何気なく誰かの噂話をしてしまったがために、その者からひどく嫌われてしまうことがある。友達を介した伝言は、大抵は話に尾ひれがついて大きな悪口となって耳に届いてしまう。誤解だと言っても手遅れとなり、お互いに望んでいなかった状況を生むだろう。

「じゃあ、これは何だ？」

裏野はわざと足音を鳴らしながら廊下を歩く。この不可解な状況も、どこかで自分が勘違いをしているからそう見えているだけだ。

誰もいない学校。たとえば今日が休日だとしても、校庭にはクラブ活動をする生徒たちがいるだろう。雨が降っても練習をするクラブもある。近くに雷でも落ちればさすがに自粛するだろうが、外は薄暗いとはいえそんな天候ではない。肌寒く、どこか寂しげな冬の景色だった。

「学校に行けない日……学校閉鎖か？」

学校閉鎖は中学生の頃に一度だけ体験したことがある。寒い冬の日、全国でインフルエンザが大流行し各地の学校で学級閉鎖が相次いだ。通っていた中学校でも一時は全校生徒のおよそ四分の一が欠席したため、ついには三日間の学校閉鎖となった。無論クラブ活動も禁止となり学校には一人の生徒もいなくなった。自分は幸いにも感染を免れたが、外出も極力避けるよう通達されたので、仕方なく家でゲームばかりをしてすごしていた。



「でも、そんなわけないだろ」

自らの推測をあっさりと捨てる。状況は校内に生徒たちがいないだけではない。なぜか自分だけはここにいて、しかも音楽室の前で他校の生徒が死んでいるのだ。何をどう勘違いすればこんな状況に陥るのか。回答を得るには誰かに尋ねるしかなかった。

「一階の職員室に行けば誰かいるだろう。もしそこに誰もいなければ学校から出るしかない」

校舎の三階にはやはり誰もおらず、一回りして屋上に続く階段の前に立った。まさか普段は閉鎖されている屋上に人がいるとは思えないので、二階へと下るべきだろう。そう思いつつ軽く視線を階上へと向ける。

屋上階段の手前で、何か赤い物体が揺らいでいた。

「何だ？」

裏野は思わず足を止めて見つめる。窓のない暗い隅に、赤いカーテンのようなものがある。奇妙なのはそれが、身長のほどの高さまで伸び上がっていることだ。天井から吊されているのか、壁に貼りつけられているのか、中に支柱でも入っているのか。いずれにしてもこんな場所では見覚えのないものだ。じっと目を凝らしてもなぜか視界がぼやけてよく分からない。風もないのにわずかに揺れ動いているように見える。目を細めて、いぶかしげな表情で近づいて行くと、突然それは大きく翻った。

「うわっ」
驚いて再び足が止まる。赤いカーテンのように見えていたものは、赤いコートを着た人間だった。それがこちらに気づいて振り返ったのだ。頭までフードをすっぽり被ったおかしな人物。それが異様に白い顔を、いや、白い仮面を着けた顔をこちらに向けていた。
「な、何だ……」
赤コートは固まったようにじっと立ち止まっている。何だこいつは。頭の中で新たな疑問が追加される。無人の校舎で出会ったのは、見たこともない人物だった。白い仮面では表情も分からない。目と口の位置には穴が開いているが、黒い影となって中身までは窺えなかった。薄気味悪くて近寄りがたい。だが無視のできる状況でもなかった。
「あ、あの……」
恐る恐る声をかけるが、赤コートは何の反応も示さない。少し頭が動いたような気もするが、錯覚かもしれない。静寂が続く。
「その、ちょっと聞きたいんだけど」
「……オイデ」
「何？」
反射的に首を前に伸ばす。今、赤コートが何か喋った。



「……コッチヘオイデ」
仮面を着けているせいか声が聞き取りにくい。まるで電話で話しているようだ。赤コートはわずかに揺れると、じわりとこちらに向かって動きはじめる。裏野は戸惑い、身動きが取れなくなった。
「コッチヘオイデ……コッチヘオイデ……」
「え、な、何だよ……」
赤コートが次第に近づいて来る。すーっと、いつの間にか進んでいるような歩き方だった。やがて姿がはっきりと見えてくる。薄汚れ、擦り切れた跡も見える赤いコート。白い仮面もわずかに赤黒くくすんでいる。右手は背中の方に回されていて見えない。左手は黒い手袋を着けているように見えた。
「こ、こんな場所で何やってるんですか？　ていうか、あんたは一体……」
話しかけつつも後ずさる。仮面が発する無表情の圧力に気圧されて、赤コートの足下まで目を落とした。ロングコートだが裾は引きずっておらず、廊下との間に隙間が見える。しかしなぜか足が見えない。右腕がゆっくりと動いて前に差しだされる。黒い右手は長い棒を握っており、棒の先には三日月状の巨大な刃がついていた。
刃の先から一滴、赤い血がしたたり落ちた。
「コッチヘオイデコッチヘオイデコッチヘオイデ」

「う、うわぁぁ！」
ただならぬ状況に声を上げた裏野は、慌てて踵を返すと廊下を走りだした。
「あ、足がなかった。それに、何だよあの鎌は……」
何が何だか分からない。ただ、まともに話のできる相手とは思えなかった。あいつが音楽室前の女を殺したのか。あの大鎌で切りつけたのか。振り返ると、赤コートが裾をなびかせてこちらへと向かって来る。長大な鎌を軽々と振り上げ、白い仮面に開いた黒い目は真っ直ぐにこちらを向いていた。
「どうする？　どこへ行けばいいんだ？」
曲がり角の壁に手をついて体を返し、さらに走り続ける。とにかく下の階に行くしかない。無機質な校舎に自分の足音だけが響き渡る。速度を緩めて下り階段に右足をかけた。
「痛っ」
突然、左足に痛みを感じて力が抜ける。バランスを崩してそのまま階段の踊り場まで転がり落ちた。何が起きたのか。だが考えるよりも早く立ち上がり、そのままさらに階段を下る。二階は前方と左手に廊下が伸び、右手にはトイレがある。とっさの判断でトイレに駆けこむと、一番奥の個室に入ってドアに鍵をかけた。
「どうしてこんな目に……」



胸を押さえて荒れる呼吸を抑える。階段から落ちたせいで肩と腰と膝、そして左のふくらはぎから痛みが伝わった。だが左足の痛みは打撲によるものではない。見ると、ズボンの裾がすっぱりと切れて、靴下に血がにじんでいた。
「切られたのか、あいつに……」
骨まで凍えそうな寒気に身震いする。あの大鎌が足をかすめたのだろう。幸いにも傷は浅く、血はほとんど流れていない。階段を下りようとして前方に体重がかかっていたおかげでかわせたようだ。もう一歩分だけ後ろに足があれば完全に切り落とされていた。
「通り魔って奴か？　それとも変質者か、殺人鬼か……」
胸の奥から心臓の音が響く。トイレの中は真っ暗で、悪臭を含んだ湿気が体にまとわりついてきた。あの赤コートは一体何者なのか。なぜあんな恰好で校舎にいて、なぜいきなり襲いかかってきたのか。分からないことだらけの事態に混乱する。個室の外からは何も聞こえてこない。うまく自分を見失ってくれたのか。だが足のない奴から足音など聞こえてくるはずもなかった。
「まずいな、ここは」
自分の状況に気づいて危機感を覚える。もしここで奴が現れたら逃げ切れない。誰かが助けに来てくれる可能性も低かった。右手をそろりと伸ばして、ドアの鍵に触れて慎重に解錠する。中腰になって身構えた体勢のまま、音を立てずにドアを開けた。誰もいない。左右を見て、天井も見上げ

るが、赤コートの裾すら見えない。どうやらひとまずは見失ってくれたらしい。トイレの出入口の直前で立ち止まり、そろそろと廊下へと顔を出す。
「……大丈夫だ。もうどこかに行ったんだ。きっと」
長く伸びる廊下にも赤コートの姿はない。まだ三階にいるのか、近くを探し回っているのか。息を殺して、足音を立てずに一歩ずつ進む。通い慣れた校舎が急に奇妙で、薄気味悪い建物に思えてきた。

## 4

二階にも人の姿はなく、この状況を説明してくれる何かも目に入らない。裏野は自分のクラスである二年A組にも立ち寄ったが、やはりクラスメイトは誰一人としていなかった。
「どこへ行ったんだよ、みんな……」
見慣れた教室には生徒たちだけが欠けている。整列した机がまるで冷たく静かに立ち並ぶ墓石のようにも見えた。授業、友達、会話、遊び。それらの光景が幾重にもなって頭に浮かぶ。何か特別なことが起きた覚えもないのに、どうしてこうなったのかが分からなかった。



「とにかく誰かに会わないと、誰か、普通の人に」
警戒しながら教室を出て、再び廊下を慎重に歩く。あんな危険な奴が校舎内をうろついている以上、声を上げたり足音を立てるわけにはいかない。だからといって、あの死体と同様に奴も放っておくわけにはいかない。さっさと誰かに訴えて、捕まえてもらわないと危険だ。
廊下の角を曲がって図書室の前を通りすぎる。この部屋は廊下側に窓がないので中の様子は窺えない。だが人の気配は感じられず、生徒が読書や自習をしているとも思えなかった。
その図書室のドアが突然ガラリと開いた。
「うわっ」
「ひゃっ」
裏野は弾かれたように横に飛ぶ。危険を察知してそのまま両腕を前に伸ばして身を守った。目を向けると開いたドアの向こうに、同じように腰を屈めて目を大きくさせた女子生徒の姿があった。
「あ、ああ……」
二人は見つめ合ったまま動かない。
女子生徒の髪は短めで、目鼻立ちがくっきりとした顔。見覚えはない。だが身に着けているのはこの高校の制服だった。
「誰だよ、お前」

「そ、そっちこそ誰？」
女はしっかりとした口調で返す。ようやく聞けた他人の声だが、そこには強い警戒心が窺えた。
「俺は……二年A組の裏野新太」
「二年D組の比嘉森亜弥。裏野君って、聞き覚えのない名前ね」
「俺も知らないよ、お前なんか」
裏野は腕を戻して背筋を伸ばす。普通だ。比嘉森亜弥におかしなところはない。死体でもなければ、いきなり襲いかかってくる様子もない。それだけに、今ここで出会ったことが不自然だった。亜弥も肩の力を抜くが目は逸らさない。その大きな瞳がわずかに揺らいだ。
「あの、裏野君。ちょっと聞いてもいい？」
「何だよ」
「今日は、その、学校って休みだっけ？」
「休み？　休みなのか？」
「ううん、違うの。そうじゃなくって……」
亜弥は自分で言っておきながら首を振る。声に強い戸惑いが感じられた。
「何て言ったらいいのか……その、私ちょっとわけが分からなくて……」
「……もしかして、何も覚えていないのか？　どうしてここにいるのかも？」



「あ、そう！　そうなの！　どうなってるの、これ」
亜弥は大きくうなずいて顔を突きだす。裏野は思わず身を反らした。
「ねえ、裏野君は知ってるの？　知ってるからそう言ったんだよね？　これって、その、何なの？」
「ちょっと待て。落ち着けよ」
裏野は亜弥を制して素早く視線を動かす。大きな声は出したくない。
「静かにしてくれ。いいな」
「あ、うん。ごめん……」
亜弥は口を押さえてうなずく。あの赤コートが現れる様子はない。だが油断はできない。
「……実は、俺にも分からないんだ。多分、比嘉森さんと一緒だと思う」
「私と一緒？　何が？」
「さっき目が覚めたら、なぜか音楽室にいた。いつ寝たのか、どうしてここにいるのかも分からないんだ」
「私もここで目覚めたの。周りに誰もいなくて、何をしていたのかも分からなくて。それで今、とりあえず外へ出ようと思ったの」
亜弥は不安げに眉をひそめる。彼女もまた、自分と同じような体験をしているらしい。
「ねぇ裏野君。みんなどこへ行っちゃったの？　他に誰かいた？」

「いや……誰も見ていない」
裏野は軽く目を逸らせる。あの赤コートの姿が頭をよぎるが口には出さなかった。正体不明の怪人をうまく説明できそうにない。それに亜弥に対してもまだ疑いの気持ちがあった。
「……ただ、人は見かけなかったけど、音楽室の前に死体があった」
「死体って、人間の？」
亜弥は目を大きくする。裏野は小さくうなずいた。
「どうして？　誰の死体なの？」
「分からない。女子で、多分高校生だと思う。でも制服が違うから別の学校の奴だ。体を切られて、殺されていた」
「どういうこと？　別の学校の子が何でうちで殺されているの？」
「だから分からないって言ってるだろ」
裏野は大声を出さずに語気を強める。亜弥の息を呑む音が聞こえた。
「いや……それで俺は、誰かに知らせようと思って校舎をうろついていたんだ」
「そう……でも、私にも分からない」
「うん」
申し訳なさそうな亜弥の顔を見て、自分が必要以上に焦っていることに気づいた。同じ境遇にいる彼女に苛立ちをぶつけても仕方がない。
「比嘉森さんが何も知らないのは分かった。とりあえず、俺は他の人を探してくる」
「どこかにいるのかな、他の人」
「校内にいなければ外に行くよ。死体があるんだから、先生か警察を呼ばないといけない」
裏野は亜弥に背を向ける。すると彼女は慌てた風に図書室から廊下へと踏みだした。
「待って、裏野君。私も一緒に行く。いいでしょ？」
「別に、いいけど」
裏野は振り返って答える。一人残されることに不安を覚えたのだろうか。ついて来いと言える自信はないが、断る理由もなかった。

## 5

裏野は亜弥とともに校舎の二階を歩く。どの教室を見ても誰もおらず、あの赤コートも煙のように姿を消していた。一周回ってから階段を下りて一階に着く。今度は背後から襲われることもなかった。
「何だか気持ち悪い。どうしちゃったんだろ、私」

亜弥が独り言のようにつぶやく。裏野の気持ちも全く同じだった。
「やっぱり休日なのかな。じゃあ何で私、学校なんかにいるんだろ」
窓の外は薄暗く、漂う空気は冷蔵庫にいるように冷たい。窓から見える木々は細い枝に虫食いの枯葉をつけていた。
「寒い……今日って何かの記念日だったのかな」
「冬休みかもしれない」
裏野は亜弥の方を見ずに返す。
「でも、クラブ活動まで休みなのはなぜだ？」
「あ、お正月じゃない？　三が日だからクラブ活動も休みに……なるのかな？」
「……それでも人が死んでいる理由にはならないよ」
裏野は冷たく否定する。年末年始にクラブ活動が禁止されているかどうかは覚えていないが、それだけでは済ませられない状況だった。廊下の窓に目を向けると、中庭を越えた向こう側に職員室が見える。窓がないので中の様子は分からないが、やはり教師たちがいるようには感じられなかった。
「あっ」
隣を歩いていた亜弥が角を曲がって突然立ち止まる。裏野もつられて足を止めると、窓から目を離して正面を向いた。



廊下の先、化学室の前に黒い学生服を着た男が立っていた。
「人だ……」
裏野はぽつりとつぶやく。背が高く、体も大きい。やけにツヤのあるリーゼント頭の下には射るような目つきと歪めた口元がある。そして身に着けている制服は、詰め襟に金ボタンのガクランだった。
「誰？　裏野君の友達？」
亜弥の言葉に裏野は首を振る。見覚えもなければどこの学校の制服なのかも分からない。尋ねてみてもいいが、男が発する敵意のような威圧感にためらった。二人は無言のまま足を進める。男は目で追いかけながら、下顎だけを軽く左右に振った。
「よぉ……」
「あ、ああ……」
男に呼びかけられて裏野は足を止める。通りすぎるわけにはいかなくなった。こいつは一体何者だ。リーゼントをワックスでガチガチに固めた髪で庇を作り、狭い額の両側には剃りこみのような切れ目を入れている。そのくせ眉毛は手入れもせずに太いままなので少し野暮ったくも見えた。対応に迷っていると男がさらに口を開いた。
「どこ行くんだよ、お前ら」
「……職員室か、外に行こうかと」

「見かけねぇ恰好してんな。どこのガッコよ？」
「どこって、庵谷高校だけど」
「そうじゃねぇよ。お前らのガッコの話だよ」
「え？」
裏野は目を丸くさせる。男の言う意味が分からない。亜弥の方を見ると彼女が代わりに尋ねた。
「あなたこそ、どこの学校の人よ」
「はぁ？　ここに決まってんだろ！　お前ら、庵谷三年の黒須和己を知らねぇのかよ」
黒須と名乗った男は頭を上下に振って睨みつける。裏野は亜弥と目を合わせると、互いに首を横に振った。わけが分からない。三年生のことまでは知らないが、黒須和己という名前に聞き覚えはない。しかも彼は紺色のブレザーではなく黒いガクラン姿だった。
「ちっ、何か調子狂うな。どうなってんだよ畜生」
茫然とする裏野たちを見て黒須は廊下に唾をはく。見た目も態度も悪い。だがどこか、自分の言動に戸惑っている風にも感じられた。
「……誰もいやがらねぇし。わけ分かんねぇ奴らがうろついているし。からかってんのかよ、ふざけやがって」
黒須はぶつぶつと愚痴をつぶやいている。それを聞いた亜弥は思い切って尋ねた。



「もしかして、黒須君も同じなの？」
「あぁ？　何がだよ」
「いきなり目が覚めたら教室にいたんじゃない？　それまで何をしていたのか、どうしてこんなところで寝ていたのかも思いだせないんじゃないの？」
「お、おう……」
黒須は驚いた顔で首の後ろを軽く掻いた。
「……さっき、そこの化学室で起きたとこだ。いつもみてぇに授業をフケて寝てたんだけど、起きたら誰もいやがらねぇ。ダチからも放っとかれたんだ」
「それ、本当？　寝る前のこと覚えているの？」
「あぁ？　覚えちゃいねぇけど、起きたんだから寝てたに決まってんだろ。何だよお前ら」
「私たちもそうなの。私は比嘉森亜弥、こっちは裏野新太君。私は図書館で目が覚めて、裏野君は音楽室で起きたらしいの。でもその直前までの記憶がないの。どうしてこんなところで寝ていたのかも分からないの」
「そんなの俺が知るかよ。大体お前ら、誰に断ってこのガッコにいんだよ。どこのモンだよ」
「だから庵谷高校って言ったじゃない。でもちょっと待ってよ。落ち着こうよ」
「これが落ち着いていられるかよ！　じゃあ、そこでぶっ殺されている奴は何なんだよ！」

「え！」
黒須は自分が目を覚ましたという化学室の方を指さす。近づいて目を向けると、ドアの向こうで男が血を流して倒れていた。
「ウソ……何これ、どうしたの？」
亜弥はうろたえて言葉を失う。男は仰向けになって四肢を投げだしている。同じ歳くらいの高校生のようだ。体に外傷は見当たらないが、息絶えていることは間違いない。なぜなら顔の右側が、スイカを叩き潰したかのように粉砕されていたからだ。
「な、何があったの？　どうしてこんなことになってるの？」
「言っとくけど俺じゃねぇからな。こんな奴、見たこともねぇからな」
黒須は男に目を向けずに返す。裏野も見覚えのない男。血と肉と骨が入り混じった赤黒い顔はおぞましく、生前の面影はほとんど残されていない。ただ、身に着けている制服は裏野のものとも黒須のものとも違う、赤茶色のブレザーにベージュのズボンだった。
「同じ、制服だ」
裏野がつぶやく。二人がこちらを振り向いた。
「こいつ、音楽室の前で殺されていた女と同じ制服を着ている。あっちはスカートだったけど」
「じゃあ同じ高校ってこと？　何なの？　どこの人たちなの？」



亜弥が裏野の言葉を引き継ぐ。
「おい、音楽室の女って何だよ。お前ら何なんだよ」
黒須が再び睨みつける。今度は裏野も目を逸らさずに睨み返した。
「あんたこそ、何だよ」
「あぁ？」
「さっきからわけの分からないこと言ったり、死体と一緒の部屋にいたり。何者だよ。うちの学校で何してるんだ」
裏野は恐怖心を振り払うようにつっかかる。亜弥はまだしも黒須は明らかに不自然だ。見た目も言動もまともとは思えなかった。
「三年の黒須和己なんて聞いたこともない。どういうことだよ。何か知ってるなら言えよ」
「おいこら、裏野って言ったな。てめぇ誰に向かって口利いてんだ」
「逆ギレすんなよ」
「逆ギレって何だよ！」
「人が殺されてるんだ。冗談じゃ済まないぞ」
「知らねぇって言ってんだろ！」
「ちょっと、二人ともやめてよ」

亜弥まで不機嫌そうに眉をひそめる。
「裏野君。黒須君もきっと同じだよ。私たちみんな似たような状況なんだよ」
「だからどういう状況なんだよ！」
「分かんないよ！　でも二人がケンカしてもしょうがないでしょ！」
亜弥は裏野と黒須を交互に睨む。裏野は反論できずに口を噤むと、小さくうなずいて肩の力を抜いた。正論だ。黒須は信用できないが、この場で彼と言い争っていても仕方がない。それに喧嘩慣れしていそうな彼と殴り合いをしたくはなかった。彼の方も一応は納得したらしく、大袈裟に舌打ちをして顔を逸らせた。亜弥は溜息をつく。
「不安だから不機嫌になるんだと思う。恐いから誤魔化そうとして怒るんだと思う。私も同じ。だから冷静になろうよ。事情が分かれば何でもなかったんだって安心できるよ、きっと」
「……人が殺されているのに何でもないはずもないと思うけどな」
「おい、誰が不安だって？　俺はビビってなんかいねぇぞ」
「じゃあ黒須君が前を歩いてよ。職員室へ行って先生を探すんだから」
亜弥が顎をしゃくって指示する。黒須は眉間に皺を寄せたが、何も言わずに背を向けると大股で歩き始めた。



## 6

半ば予感していたことではあったが、職員室にもやはり教師たちの姿は見あたらなかった。教室二つ分ほどの広さに灰色の事務机がずらりと並んでいる。普段と変わりなく、机の上には教科書や書類、プリントなどがあふれ返っている。私物のマグカップや孫の手、椅子の座面に敷いた古びたクッションなどもそのままだった。
「すみませーん。誰かいませんかー？」
亜弥は職員室の奥に向かって声をかけるが返事はない。コーヒーや整髪料などの臭気が入り混じった、職員室特有の匂いが鼻についた。
「ちっ、舐めてんじゃねぇぞ」
黒須は近くの事務椅子を乱暴に蹴りつける。その遠慮ない行動から、普段の彼の態度がよく分かった。裏野は職員室へは入らずに廊下の左右や中庭を忙しなく見回す。遠くの暗がり、木々の陰、窓の向こう。動く者の影すら見えない。だが、誰かに見られているような気がしてならなかった。
「何で先生もいないの？　校舎で人が殺されているのに……」
亜弥は片手を口元に添えてつぶやく。その表情には不安よりも不信感の方が強く表れていた。黒

須は不機嫌そうに溜息をつく。
「生徒がぶっ殺されちまったから逃げたんだろ。センコーなんてクソみてぇな奴らばかりだからよ」
「そんなことないと思うけど……」
「ちょうどいい。ダチがパクられた花札とヤニを取り返してやるか。ラオウの机はどこだ」
「ラオウって何？」
「ああ？　体育のセンコーに決まってんだろうが。名前は忘れた。ラオウみたいにいかついオッサンだよ」
黒須は聞き覚えのないあだ名を説明しながら机の抽斗（ひきだし）を次々と引き開けていく。亜弥が不思議そうな顔で振り返ったので、裏野は首を振って応えた。
「やっぱり外へ出るしかないかな、裏野君」
「ああ、そうだな」
裏野もちらりと職員室に目を向ける。生徒たちが呼んでいるのに隠れているとも思えない。いないのならさっさと学校から出た方がいいだろう。そう考えてから、ふと違和感に気づいた。
「そういえば、何で職員室が開いているんだ？」
「どういうこと？」
「鍵だよ。俺たちの教室ならともかく、職員室は鍵くらいはかけるだろ。誰もいないのに開けっぱなしなんて不用心じゃないか」
「ああ、それもそうだよね。先生たちの私物やお金もあるだろうし」
「おまけに個人情報の宝庫だ」
「個人情報って何？」
「何って、俺たちの成績表とか住所録とかあるだろ。今どき、誰かに盗（ぬす）まれたら大騒ぎになる」
「ふうん。そんなの欲しがる人なんているかな。でもやっぱり戸締まりはするよね、普通」
亜弥は裏野の話を軽く聞き流すが、職員室が開いていることのおかしさは理解できたようだ。
「そんなのどうでもいいだろ。俺は端（はな）から期待してねぇよ」
黒須は面倒そうな顔で引き返してくる。
「ラオウ先生の机はあったの？」
「分かんねぇ。覚えのある机に行ったけど、別の奴が使ってるみてぇだ。おら、いねぇなら外（そと）出んぞ」
黒須はさっさと職員室を出ると廊下を歩きはじめる。彼の言う通り、先生たちがいない理由を言い合っていても仕方がないだろう。裏野は亜弥と軽く目を合わせると黙ってガクラン男の後に続いた。

# 7

職員室のすぐ近くにある昇降口から裏野たちは校舎の外へと出る。寒々しい空は相変わらずどんよりと曇り、風もないので空気も澱(よど)んでいるように感じられた。左手には体育館へとつながる屋根つきの廊下があり、右手には高いネットに囲まれたグラウンドが広がっている。正面には枯れた桜並木と石畳(いしだたみ)が正門まで続いていた。

「正門も開いてるな」

裏野は黒須の後ろでつぶやく。正門には檻(おり)のように黒くて重い引き戸があるが、それも今は門の右側にしっかりとしまわれている。あくまでも学校は通常通りであるといった光景だった。

三人は無言で石畳を歩く。先頭の黒須は振り返ることもなく、隣の亜弥は運動場の方に顔を向けている。裏野も二人に向かって積極的に話しかける気はなくなっていた。元から奇妙な出会いで集まった三人だ。状況が不可解であっても、外へ出て助けを求めると決めた時点で、もう他の二人に用はないだろう。亜弥とは今後も校内で顔を合わせる可能性はあるが、それでも今は談笑する気になれない。彼女の思いもきっとそうだろう。ましてや黒須とはもう関わりたくもなかった。



「いてっ」

その黒須が突然、声を上げてその場に尻餅(しりもち)をつく。裏野と亜弥も驚いてその場に立ち止まった。

「くそっ、何だよ」

「何やってんの、黒須君？　いきなり倒れたりして」

亜弥は目を丸くさせる。三人はちょうど学校の出口、校門の前まで辿(たど)り着いていた。黒須は苛立たしげに立ち上がる。

「ぶつかって来やがったんだよ！　畜生！」

「ぶつかって来たって、何が？」

「だから！」

黒須は素早く左右に目を向ける。正面には道路をへだてて街並みが広がり、左右には校門の柱から塀が続いている。誰もおらず、何かが動く様子もなかった。

「どうしたの？　私からは黒須君が勝手に倒れたようにしか見えなかったよ。ねぇ裏野君」

「ああ……つまずいたか、眩暈(めまい)でもしたのか？」

「そんなわけねぇだろ！　こう……」

黒須は正面に向かって勢いよく右手を伸ばす。だがその腕は何かにぶつかったように、なぜか途中で静止した。

「……何だこりゃ？」
黒須は腕に力をこめるが、肘から先がそれ以上前に進まない。裏野も異変に気づいて黒須の脇から腕を伸ばす。すると同じ位置で掌が何かに触れた。
「壁だ……ここに壁があるぞ」
ゆっくりと掌を押し当てて確かめる。何もないはずの空間に、何かがある。校門より先、学校の敷地より外は透明な壁によって阻まれていた。
「本当だ……何これ、どうなってんの？」
亜弥も両手を壁につける。傍目にはパントマイムのような動きにしか見えないが、彼女は呆気にとられた顔を見せていた。透明な壁は手に吸いつくようなしっとりとした感触を持ち、強く押すとわずかな弾力が感じられる。粘土よりもやや硬く、近い物ではスニーカーの靴底や自動車のタイヤのような素材が想起された。
「ふざけんじゃねぇぞ！」
黒須は一歩退くと勢いをつけて壁に殴りかかる。重みのある一撃に見えたがこちらまで振動が伝わってくることはなかった。さらに片足を上げて蹴りつけるがやはりびくともしない。乱暴な力は分厚いゴムのような見えない壁に全て吸収されていた。
「気持ち悪いな。何がどうなっているんだ」



裏野は腕を真上に目一杯伸ばすが壁はそれよりも高く立ち塞がっている。しゃがみこんで触れてみても下は地面の際まで続いており、どうやら地中深くまで埋められているようだ。立ち上がって、今度は校門の柱の横に触れる。こちらも隙間は全くなかった。
「何の冗談よ！　誰か開けてよ！」
亜弥までもが細い足で壁を蹴りつけるが、黒須で敵わなければどうにもならない。裏野は校門から離れると、学校を取り囲む塀の方へと足を進めた。見なれた若草色の塀は二メートルほどの高さがある。軽く飛び上がって縁をつかむと、懸垂の要領で体を持ち上げて塀の上に登った。
「うわっ、ダメか」
体が透明な壁に触れて体勢が崩れる。何とか持ち直すと、壁に寄りかかるようにして塀の上に立ち上がった。塀を越えて外に出られるかと期待したが、壁はこちらまで続いてるようだ。塀の上を歩いてみるが壁は途切れる様子もない。諦めて再び学校の敷地側へと飛び降りた。
「完全に、取り囲まれている……」
校門前では亜弥が大きめの石を壁に擦りつけている。尖った箇所を押し当てているようだが、透明な壁には傷も擦り跡もついてはいなかった。
「ぜんっぜんダメ。穴なんて開きそうにもないよ」
「もの凄く分厚くて頑丈ってことか」

それでいて壁は白濁もせず、向こう側の景色も歪んではない。完全な透明度を持った弾力性のある壁。少なくとも裏野の日常では見たことのない素材だった。
「く、黒須君！　大丈夫？」
亜弥が見上げて声を上げる。黒須が校門の柱よりもさらに高い空中に浮かんでいる。いや、体全体を使って透明な壁に張りついていた。ガクランの下にある全身の筋肉を小刻みに震えさせながら、まるで緩慢なカエルのようにゆっくりと壁を上がっていく。だがやがて耐えきれずにずるずると地面に下りた。
「畜生！　どんだけ高いんだよ。せっかくかなり上まで行けたのによ！」
「黒須、比嘉森さん、ちょっと見ていてくれ」
裏野は近くの石を拾うと壁の上を目がけて全力で放り投げる。先ほど黒須が到達した高さの倍ほどまで上がったが、石は壁に当たって学校側へと落ちた。
「……壁を乗り越えるのは無理だ」
「くそっ、誰がこんな真似しやがったんだ！」
「じゃあ学校から出られないってこと？　私たち閉じこめられたの？　ウソでしょ？」
黒須と亜弥が口々に叫ぶ。外へ出られると確信していただけに、それが不可能と分かった時のショックは大きかった。透明な壁が学校を取り囲んでいるなど誰が思うだろうか。だが絶望的な現



実は目の前に立ち塞がっていた。
「どうして、こんなことになってるんだ。俺たちを閉じこめて、どうしようっていうんだ」
裏野は透明な壁にそっと手をつける。現状が全く理解できない。自分たちを外へ出さないためだけに、金と労力をかけてこんな壁まで用意したというのだろうか。もしそうではないとすれば、他にどんな目的があるというのか。
「……校舎へ戻るしかないのか」
「戻ってどうにかなるのかよ」
黒須は地面に腰を下ろしたまま裏野を見上げる。そんなことは分かるはずもなかった。
「あ、だ、誰かいるよ！」
突然、亜弥は校舎を指さす。裏野が目を向けると三階建てのさらに上、屋上の欄干に何やら黒い影のようなものが見えた。
「……本当だ。何だあれ」
目を凝らすが、空が暗いせいもあってよく見えない。ただ、風になびいているのではなく、意思のある動きのように感じられた。
「裏野君、屋上へは行ってみた？」
「行ってない。まさか人がいるとは思わなかったから」

「あ、もう一人出てきたよ」
遠くの影は二つに増えると、下半身が隠れた人形劇のような動きを見せる。その内どちらも下に隠れて、もう現れることはなかった。
「……何だったんだ。人か？　カラスか何かか？」
「私は人影に見えたよ。こっちを見ていたようにも思う。この学校、他にも誰かいるんじゃない？」
「それならどうして隠れたんだ？　それともこれからこっちへ来るつもりなのか？」
「行ってみりゃいいじゃねぇか。敵だったら俺がボコボコにしてやる」
黒須は片膝を立てて腰を上げると、屋上のあたりを睨みながら校舎へと引き返しはじめる。裏野は敵という言葉に新たな不安を抱きはじめていた。

## 8

校舎内は先ほどよりもさらに薄気味悪さが増したように感じられる。それは雲に隠れた陽がそろそろ傾きはじめる時刻というのもあるが、それ以上に心理的な危機感が強まったからでもあるだろう。
奇妙な目覚め、殺害された生徒、見知らぬ者たちとの出会い。それだけでも充分不自然ではある



が、まだ気持ちの上では単なる『不可解な事態』として一応の納得はできていた。
だが透明な壁に阻まれて学校から出られないというのは、そもそも理解の範疇を完全に超えている。あり得ない事態に遭遇しているのは間違いなかった。
「誰が、こんなことをしているんだ」
校舎の一階から階段を上りながら裏野はつぶやく。学校から出られないのは錯覚や勘違いではない。明らかに何者かの意思が働いており、自分たちはそのせいで学校に閉じこめられていた。誰が、何の目的でこんなことをしているのか。音楽室の前と化学室で殺害されていた死体とも関係があるのか。頭の中にあの赤コートの姿が思い浮かぶ。あの怪人も無関係とは思えなかった。
「なんか変だな、この学校……」
前を歩く黒須がぼんやりと言う。
「何が変なんだ？」
「分かんねぇけどよ。もっとこう、薄汚れていたような気がするんだよ。こんなに綺麗だったか？」
「……あんたの学校の話だろ、それは」
「だから、これが俺の学校だって言ってんだろ！」
「待って……何か聞こえない？」
三人が二階へと辿り着いた瞬間、亜弥がいきなり声を上げる。裏野と黒須は口を閉じて足を止めた。

どこからともなく、すすり泣くような声が聞こえていた。
「あぁ？　女の声だな。泣いてんのか？」
黒須はゆっくりと首を回すが誰も見当たらない。裏野は腰を屈めて静かに耳を澄ました。声は階段の右手、先ほど赤コートに追われて逃げ込んだトイレの方から聞こえてくる。
「……女子トイレに、誰かいるんじゃないか？」
三人は足音を立てずにトイレに向かう。薄暗い女子トイレの奥で、しゃくり上げるような泣き声が反響していた。
「ちょっと何よ……オバケなの？」
「まさか」
裏野は亜弥の言葉を否定する。この上オバケまで出てこられてはたまらない。
「また、俺たちみたいな奴じゃないか？　何も分からずに目が覚めて、トイレに閉じ籠もっているのかもしれない」
「そうかも。じゃあ放っておけないよね」
「面倒くせぇな。おい、ちょっと見てこいよ」
黒須はいぶかしげな顔でトイレの奥を睨んだ後、亜弥の方に目を向ける。裏野も彼女に向かってうなずいた。



「ええ、私に行けって言うの？」
「一応、女子トイレだし、頼むよ」
「しょうがないなぁ……じゃあ二人ともここで待っていてよ。何かあったら呼ぶから助けに来てよね」
「分かった」
「……助けてくれるんだよね？」
「さっさと行けよ。俺が助けてやるよ」
黒須は眉間に皺を寄せて亜弥を睨む。彼女も鋭（するど）い目を向けるが、何も言わずに肩をいからせて女子トイレへと入って行った。
「ねぇ……誰かいるの？」
亜弥が声を上げると、すすり泣く声はぴたりと止まる。
「……奥の個室にいるのかな？　あの、私たち、この学校の生徒なんだけど、その、よく分からないけどここにいるの。あなたもそう？　開けてくれる？」
亜弥の言葉に応じて静かにドアが開く。裏野と黒須はわずかに顔を緊張させた。だが何かが飛びだしてくるような様子もなく、やがて亜弥は肩を下げてほほえんだ。
「良かった……こんなところで泣いているからオバケかと思ったよ。大丈夫？」

「……予想通り、みたいだな」
裏野は溜息をついて壁にもたれかかる。黒須も鼻から息を吹いてその場にしゃがんだ。
「屋上の奴らが隠れていたのかよ」
「いや、さっきの奴らがトイレで泣いているのも変だ。きっと別の奴だろう」
裏野は女子トイレから目を逸らす。廊下は一直線に伸びて見通しがいい。何が現れてもすぐに発見できるが、それは相手にとっても同じことだろう。
「……この分だと他にも誰かいるかもしれないな」
「おいおい、隠れんぼしてんじゃねぇぞ」
黒須はぼやく。裏野は顔を戻して彼のリーゼント頭を見下ろした。態度は乱暴だが卑劣な男とは思えない。少なくとも嘘をついて自分たちを騙すほど器用には見えなかった。
「しかし、わけ分かんねぇな。どいつもこいつも、一体全体どうなってんだよ」
「……あんたも、どういうつもりなんだ？」
「あぁ？」
黒須はリーゼント頭を上げて裏野を睨む。裏野も目を逸らさない。
「何であんたはこの学校を、庵谷高校を自分の学校だって言うんだ？」
「……何度も同じこと言わせんなよ、裏野」



「先輩らしいけど、三年の黒須なんて聞いたこともない。第一、着ている制服からして違うじゃないか。何が目的なんだよ」
「おかしなこと言ってんのはそっちだろ。うちは昔っからずっとガクランなんだよ。そんなお坊ちゃんみたいな制服なんて、カッコ悪くて着られるかよ」
「庵谷高校は前からずっと紺のブレザーだ。俺がそんな嘘をついてどうするんだよ」
「じゃあ俺が嘘ついているって言うのかよ」
「そうは思えない。だから困っているんだ」
「はぁ？」
黒須は眉を上げる。裏野は喉の奥で唸ってから口を開いた。
「……もし、俺たちの話がどちらも本当だとしたら、一体何が起きているんだ？」
「どっちも本当だと？　あり得ねぇだろうが」
「でも、あり得ないことが起きているんじゃないか？」
「裏野君、黒須君」
亜弥が女子トイレから廊下に戻って来る。その後ろには小柄で長髪の、おとなしそうな少女が続いて来た。
「やっぱりこの子も私たちと同じみたい。さあ、この人たちは大丈夫だよ」

亜弥にうながされて少女が前に出る。その姿を見た瞬間、裏野は思わず息を呑んだ。彼女は赤茶色のブレザーにベージュのスカートを身につけていた。
「あの……一年の、蟹目、紗耶香です……」
「その制服は……」
「やっぱりそうなの？　裏野君」
亜弥の問いに裏野はうなずく。紗耶香と名乗った少女は、音楽室の前で殺害されていた女子と同じ制服を纏っていた。
「私、向こうの二年の教室で目が覚めたんですけど、何も覚えていなくて、それで学校の外へ出ようとしたら出られなくて……」
紗耶香は小さな声でぼそぼそと話す。ひどく内気な性格らしく、それだけにどこか得体のしれない印象が強く感じられた。
「俺たちも行ったぜ」
黒須は大儀そうに腰を上げる。
「でも見えねぇ壁があって出られなかった。ありゃ何だ？」
「わ、私にも分かりません。でもどうしても出られなくて、それで仕方ないからまた学校に戻って来たんです。そうしたら、あの、おかしな人に襲われたんです」



「何だと？」
「まさか、赤い奴か？」
裏野は思わず紗耶香に尋ねる。だが彼女は不思議そうな顔で首を振った。
「いいえ。黒っぽい人たちでした。薄暗くてよく分からなかったけど、赤ではないです。その人たちが追いかけて来たんです。待てって言いながら。それで恐くて逃げだしたんです」
「何で赤なの？」
亜弥は尋ねるが裏野は曖昧に首を振る。どうやら学校にいるのはあの赤コートだけではないらしい。
「黒い奴と言えばよぉ、あの屋上にいた奴らじゃねぇか？」
黒須は天井に目を向ける。裏野たちの行動を見下ろして、姿を隠した者たち。奴らが敵であるならば、紗耶香を襲ったのも納得できた。少女は続けて口を開く。
「私、何とかここのトイレに逃げこんだけど、そしたらもう外へ出るのが恐くなって……お姉ちゃんとも離れ離れになって……」
「お姉ちゃんもここにいるの？　二人で逃げていたの？」
亜弥の言葉に涙目の紗耶香がうなずく。
「お姉ちゃんと、愛東先輩が一緒でした」
「それは誰？」

「目が覚めてから出会った人です。男子で、二年生って言ってました」
亜弥は裏野と黒須の方を見る。二人とも首を振って知らない人物だと伝えた。一体どれだけの人間がこの学校にいるのだろう。本当に皆、同じ状況にあるのだろうか。黒須が紗耶香に向かって腰を屈める。
「よぉ、蟹目って言ったな。俺は三年の黒須和己だ。ちょっと聞いていいか？」
「は、はい……何でしょうか」
紗耶香はそっと亜弥に寄り添う。黒須はやりにくそうに眉間に皺を寄せた。
「……お前よぉ、どこのガッコのもんだよ」
「学校？　私の学校はここ、庵谷高校ですけど……」
紗耶香はためらいなく答える。黒須は小さく何度もうなずくと背筋を伸ばして裏野と亜弥を見回した。
「み、皆さんは、どちらの高校の方ですか？　どうしてここにいるんですか？」
「おい裏野、比嘉森、どうすんだよ。これでも俺だけがおかしいって言うのかよ。ちなみにうちの学校の女どもはセーラー服を着てやがったぞ」
「そんなバカな……」
裏野は呆気に取られる。紗耶香の制服は亜弥の制服とは明らかに違う。裏野の制服も黒須の制服



とは全く違う。それにもかかわらず、全員が同じ高校の生徒だと言い張っているのだ。やはり何か、常識では考えられないことが起きているに違いない。亜弥が取り繕うように声を上げた。
「……とにかくみんな、屋上に行ってみよう。こうなったら気になるところから調べるしかないよ」
「まあ、制服なんてどうでもいいだろ。行くぞ」
黒須は廊下に唾をはくと、皆に背を向けて歩きだす。裏野はうなずき、亜弥は紗耶香に顔を向けた。
「紗耶香ちゃんも来るよね？」
「私……私は嫌です。もう帰りたい……」
紗耶香は顔を伏せて鼻をすする。裏野は黒須の背を目で追ってから女二人の方を振り向いた。
「俺も屋上へ行くよ。行きたくないなら好きにすればいい。でも、トイレに隠れていてもどうしようもないし、そこから外へ出られるとも思えないよ」
裏野はそう言ってから歩きはじめる。薄情かもしれないが、見知らぬ女の泣き言に付き合っている余裕もない。だが何が正解なのかも分からない以上、無理に連れて行くわけにもいかなかった。背後から亜弥の声が聞こえる。
「紗耶香ちゃんも行こ。何がどうなっているのか分からないけど、一人でいちゃ危険だよ。お姉ちゃんも捜さなきゃいけないんでしょ？」
裏野は慎重に周囲を見回しながら階段へと向かう。もしも自分が危険な目に遭ったら、亜弥や黒

須は助けてくれるだろうか。敵ではないと思うが、味方と認めるほどは信用できなかった。紗耶香が亜弥に何と答えたのかは聞こえなかった。ただ背後から響く足音は二つに増えていた。

## 9

三階に上がり、さらに屋上階段を上がる。普段は施錠されているはずの鉄扉が今日はなぜか開いており、四人は難なく屋上へと出ることができた。先頭を歩く黒須はすぐさま左右に目を走らせて不審者を捜す。続く裏野も同じように周囲を見回すが、人の姿も鳥の影も見つからなかった。

「……いねぇな。もう逃げたか」

「どうだろう。隠れているかもしれない」

裏野と黒須は顔を合わせずに会話する。広い屋上には巨大な円筒状の給水タンクやエアコンの大型室外機、案山子のようなアンテナ塔が建ち並び、地面を這う太い配管やドーム状の天窓とともに見通しを悪くしていた。空はさらに暗みを増し、やはり風は感じられない。この高さでも爽快さや解放感とはほど遠く、ねばつくような嫌な予感がそこかしこから染みだしてくるように感じられた。

「誰もいないみたい。でも念のために一回りしてみようか」



背後からの亜弥の声を受けて、裏野と黒須は別々の方向に足を向ける。黒須はズボンのポケットに手を突っこんだままガニ股で歩くが、裏野は両腕を中途半端に曲げたまま、やや中腰になって慎重に歩を進めた。遠くには校庭が見え、校門があり、街並みが広がっている。屋上から眺めるのは初めてだが、確かめるまでもなく自分の街の風景だった。

「別世界にでも連れて来られたんだろうか」

裏野は厚い雲のせいで随分と低くなった空に向かってつぶやく。自分が存在する世界とは異なる、もう一つの世界。そこでは一切の常識が通用せず、理解できないことばかりが起きる。今の状況はまさしくそうだろう。

「でも、そういう問題じゃないよな」

自分の想像を自分で否定する。ここが異世界であると知ったところでどうしようもない。肝腎なのは、これがどういう状況であって、どうすれば日常を取り戻せるかだった。

「み、みんな！　ちょっと！」

突然、亜弥が慌てた風な声を上げる。裏野は素早く振り返ると駆け足で彼女の元へと向かった。黒須も大股で引き返す。出入口からほとんど動いていなかった紗耶香も遅れて歩きだした。亜弥は周囲と、なぜか自分の足下をしきりに見回していた。

「何かあったのか？　比嘉森さ……」

先に近寄った裏野が声をかける。だが彼女の足下を見た瞬間、思わず声が止まってしまった。
腹を大きく切り裂かれた男が、仰向けに倒れていた。
「死体が……」
背後に黒須と紗耶香の気配を感じたが、裏野は足下の光景から目が離せなかった。赤茶色のブレザーに、ベージュのズボン。またもや見知らぬ制服を身に着けた男子高校生だった。強い癖毛の下の顔を恐怖に歪めて、開いたままの両目は暗い空を凝視している。両腕は肘を曲げたまま投げだし、両足はなぜか膝を曲げて正座をしていた。そして腹部には制服ごと大きな亀裂が入っており、真っ赤な裂け目から肉片か内臓のような塊が床にまであふれだしていた。
「一体どうなってんの？　何でこんなに人が死んでるの？」
亜弥は三人に向かって問いかけるが、答える者は誰もいない。
「よぉ……こいつだったか？　さっきここから俺たちを見ていた奴」
黒須は固まったように顔をしかめたまま裏野に尋ねる。
「……分からない。こいつだったかもしれないけど、結構遠かったからよく見えなかった」
裏野は亜弥を見る。彼女は唇を噛むように強く口を閉じたまま首を振った。
「でも、こいつは……」
続けて話そうとしたが、湿った血の臭いが鼻を突いて顔を逸らす。うつむいて軽く咳払いをして



から目を上げると、死体の顔をじっと見つめる紗耶香が目に入った。
「……どうした、蟹目さん」
「成木君……」
紗耶香がぽつりとつぶやく。亜弥と黒須も振り返った。
「……こ、この人、同じクラスの、成木……准一君です」
「こいつと知り合いなのか。どうしてこんなことになっているんだ？」
「分かりません……何で……」
紗耶香は目を伏せて首を振る。
「紗耶香ちゃん。この人、どういう人なの？　何かあったの？　君と何か共通点とかないの？」
亜弥は矢継ぎ早に質問するが、紗耶香はただ首を振るばかりだった。
「同じクラスの人が死ぬなんて……」
「ただ死んでいるんじゃない。殺されているんだ」
裏野は自分に言い聞かせるように返す。クラスメイトが殺されている。それは紗耶香だけでなく、裏野たちにとってもより身近な恐怖となって襲いかかってきた。
「殺されているってことは、殺した奴がいるってことだよね……」
「おいおい、じゃあさっきの奴らがこいつを殺したんじゃねぇか？」

黒須は死体の方を見ずに言う。もしそうだとしたら、裏野たちの視線に気づいて姿を隠したこともうなずける。そして奴らの方もこちらの存在に気づいていることだろう。
「ふざけんじゃねぇぞ。何があったか知らねぇけど、殺しちまったらケンカじゃねぇだろ」
「人ごとじゃないな。もしかすると、この成木という奴が殺されたんじゃなくて、俺たちがまだ殺されていないだけなのかもしれない」
「それってどういうこと？　裏野君」
「つまり、俺たちは殺されるためにこの学校に閉じこめられているんじゃないかってことだよ」
裏野は亜弥に向かって答えるが、彼女は眉を寄せて首を傾げた。
「でも誰が？　どうやって？　何のために？」
「そんなの知るかよ。でも、絶対に誰かが何かをしているんだ」
あの赤コートか、屋上にいた奴らか、紗耶香が追いかけられた黒っぽい人たちか。その中の一人か、あるいは全員が何かをしているに違いない。学校にいる生徒たちを捜しだしては、殺し回っている。自分たちは生贄のようなものかもしれない。
「何が目的なんだ？　俺たちを殺してどうしようっていうんだ？」
「考えるこたねぇだろ。そんなのよ」
裏野の自問を踏み潰すかのように、黒須がかかとで地面を蹴った。



「誰かが殺しているって言うならよぉ。そいつを捕まえりゃいいだけだ。そしたら全部分かる。ガッコから出る方法もな」
「それはそうだが……」
裏野は成木の死体にちらりと目を向ける。無慈悲に腹を裂いて、内臓を引きずりだすような奴を果たして捕まえられるだろうか。だが、どこにも逃げられない限りは自分たちで何とかするしかなかった。
「ねぇ、とりあえずもう屋上から出ようよ。成木君は可哀想だけど、今はどうしようもないよ」
亜弥は鼻と口を手で押さえたまま言う。彼女の言う通り、惨殺死体の前で話し合うのも辛かった。紗耶香は青ざめた顔でうつむいたまま、ただ小動物のように震え続けていた。

## 10

四人は屋上を出ると裏野を先頭に階段を下りる。そのまま導かれるかのように三階からも下りると、裏野のクラスである二階の二年A組に入室した。校内で一番安心できる場所を求めてそうなったのだが、他の三人も何も言わずにつき従って来た。

「まるでホラー映画みたいだ」
裏野は窓際の中ほどにある自分の席に座る。緊張し続けていたせいか、鉄アレイをかかえているような重い疲労感が体にのしかかってきた。先に覗いてみた通り、教室にはクラスメイトの一人も見当たらない。それ以外の何者かも待ち伏せてはいなかった。
「ホラー映画？　何で？」
前の席で横向きに腰かけた亜弥が尋ねる。自分のクラスに彼女がいる光景がやけに奇妙に思えた。日常と非日常とが混ざり合う感覚とでも言うのだろうか。もっとも、教卓のそばに立つガクラン姿の黒須や、隣の席で所在なさげに座る赤茶色のブレザー姿の紗耶香の方がよほど不自然ではあった。
「何となく、この状況がホラー映画っぽいなと思っただけだよ」
裏野は背筋を伸ばして天井を仰ぐ。
「……いきなり学校で目が覚めて、目の前に死体があって、外へも出られなくて、そのうちにゴロゴロと死体ばかりが見つかる。海外のスリラー系の映画にありそうじゃないか、そういうの」
「ふうん……まあそうだね」
亜弥は曖昧な口調で同意する。
「……ホラーって言うから、私は別のものを想像したよ。えっと、井戸から髪の長い女が出てくる奴とか」



「何だそれ。昔の怪談か？　お皿を数えるとかいう」
「違うよ。あの、ビデオテープを再生したらテレビから出てくる奴だよ」
「ああ、そういうのもあったらしいな」
裏野はぼんやりと返す。だが亜弥は意外そうな顔を見せた。
「何だ、裏野君知らないの？　有名なのに」
「いや、知ってるよ。でも古いだろ」
「え、そう？　そうかなぁ」
亜弥は不思議そうに首を傾げる。自分で『ビデオテープ』と言ったことには気づいていないようだが、そこを指摘してまで話を広げる気にはなれなかった。
これからどうするべきだろうか。黒須が言った通り、生徒たちを殺害している犯人を見つけだすしかないのだろうか。一体何が起きているのか。どうすれば自分たちは解放されるのか。犯人ならきっと真相を知っていることだろう。
だが一方で、自分たちもまた犯人の標的となっている可能性も捨てきれない。捕まえるどころか、逆に襲われる危険性も大いに考えられた。胸を切り裂かれていた音楽室の女、頭を潰されていた化学室の男、内臓を引きずりだされていた屋上の男。あんなことをする犯人とどう戦えというのか。だが四人で力を合わせれば、あるいは何とかなるかもしれない。比嘉森亜弥、黒須和己、蟹目紗耶

香。ただ目の前にいる彼らは本当に自分の味方なのだろうか。
「何か、おかしいんだよなぁ」
黒板の近くで黒須が教室を見回している。
「よぉ、ここって本当に庵谷高校なのか？　なんか違う気がしねぇか？」
「そんなのずっと思ってるよ」
亜弥が机に肘をついて返す。
「透明な壁に囲まれた校内で三人も殺されているなんて、おかしいに決まってるでしょ」
「そうじゃねぇよ。俺、あんまガッコに興味ねぇけどよ。二年A組ってここじゃなかったんじゃねぇか？」
「ここだよ」
裏野はあっさりと否定する。
「俺のクラスなんだから、間違うはずがないだろ」
「……綺麗すぎるんだよ、なんか。黒板に傷も入ってねぇし、床に煙草の焦げ跡もねぇ」
「当たり前だろ」
「あ、あの、私もそう思います……」
隣の席に座る紗耶香が小さく手をあげる。どっちの意見に賛同しているのか分からなかった。



「えと、黒須先輩の言う通りというか。トイレの鏡も新しくなっている気がしました」
「そう？　私は気づかなかったけど、取り替えたのかな」
亜弥が不思議そうに声を上げる。黒須は片方の眉を吊り上げた。
「はぁ？　便所の鏡なんて普通、全部割れてるもんだろ」
「そ、そんなことはありません」
「そんなわけないでしょ」
紗耶香と亜弥が同時に否定する。黒須は顔をしかめると苛立たしげに黒板を拳でドンドンと叩いた。やはり黒須と紗耶香の二人は庵谷高校の生徒だとは思えない。それでは彼らは何者なのか。敵ではないと思うが、安易に信用できない理由はそこにあった。
「おいおいおい、何だよこりゃ！」
黒須が驚いたように声を上げる。いちいち騒々しい奴だが目を向けないわけにもいかない。彼は黒板の端を真横から見つめていた。
「今度はどうしたんだよ、黒須」
「こ、ここに文字が書いてあるんだけどよ」
「文字？　何が書いてあるんだ？」
「『寄贈　一九九三年　卒業生一同』って、どういうことだよ！」

黒須は黒板とこちらを交互に見ながら言う。裏野の口から呆れたような溜息が漏れた。
「……どうしたのかと思ったじゃない」
亜弥は机に突っ伏して返す。裏野は怒る気にもなれず顔を逸らす。紗耶香も首を傾げていた。
「おい比嘉森。どうしたのかって、どういうことだよ」
「どういうことも何も、『寄贈　一九九三年　卒業生一同』って書いてあるだけでしょ。それはね、一九九三年の卒業生がその黒板を学校に贈りましたって意味よ」
「お前、俺のことバカにしてんだろ。何でそうなってんだって聞いてんだよ」
「そんなの私が知るわけないでしょ！　贈ったんだからそうなんでしょうが」
「お前の方がバカなのか？　一九九三年って何だよ。一九八三年とか、一九八八年の間違いじゃねぇのかよ」
「もう、いい加減にしてよ！　書いてあるんだからそうに決まってるでしょ。何で一九八八年になるのよ」
「おかしいじゃねぇか！　今が一九八八年なんだから。未来の卒業生から贈られてきたって言うのかよ！」
「ええ？」
裏野、亜弥、紗耶香の三人が同時に声を上げた。



「な、何だよお前ら。揃って気持ち悪ぃな……」
黒須が珍しくたじろく。その戸惑いの表情から、彼が嘘をついていないことが分かった。
「……黒須。今、何年って言ったんだ？　なぁ、今が何年だって？」
「だから、一九八八年……昭和六十三年。何月何日かは覚えてねぇけどよ」
黒須は口をすぼめて答える。三人は茫然として顔を見合わせた。何か、とてつもない真相に近づいた予感がする。やがて紗耶香が黒須に向かって口を開いた。
「ち、違います、黒須先輩」
「あぁ？　何がだよ」
「あの、今は一九九五年、平成七年です……」
「何だそりゃ？　おい、ヘーセーって何だよ」
「まさか……」
裏野と亜弥は見つめ合う。黒須と紗耶香はこちらの回答を待っている。
「ち、違うよね裏野君。一九八八年でも、一九九五年でもないよね」
戸惑う亜弥の言葉に裏野は強くうなずく。
「今は、二〇〇一年だよね？」
だが続く言葉には強く首を振った。

「……俺の覚えている限りだと、今は二〇一三年なんだけど」
裏野の答えに三人はぽかんと口を開けた。
「二〇一三年だって？　おい、何言ってんだお前」
黒須がふらふらとこちらに近づく。
「一体何の話をしてんだよ。今の話じゃねぇのかよ」
「今の話だよ。二〇一三年。俺は一九九六年生まれだ」
裏野は紗耶香に向かって言う。彼女は、そんな、とだけつぶやいた。
「はぁ？　何なんだよ、裏野。お前、未来人かよ」
「現代人に決まってるだろ。黒須こそ何なんだよ。一九八八年って、どんだけ古いんだよ」
「今なんだよ！　今が一九八八年に決まってんだろ！　おい、そんなおかしなことを何で黙ってたんだよ！」
「今年が何年かなんて、わざわざ言うものじゃないだろ。お前だって、本当に気づいていなかったのかよ。二十五年も昔なんだぞ」
「騙しやがったな！　てめぇ仲間の振りしやがって、全然違うじゃねぇか！」
「ねぇ、ちょっと落ち着いてよ二人とも！」
亜弥が激昂する裏野と黒須を抑える。



「……つまり、そういうことだったのよ。だから話が噛み合わなかったんだよ。だから制服も違うのに、みんなここの生徒だって言うんだよ」
三年生の黒須和己も、一年生の蟹目紗耶香も嘘をついてはいなかった。そして二年D組の比嘉森亜弥は、裏野の同級生ではなかった。同じ制服を着ていても、彼女は十二年も前の生徒だった。
「おいおい、冗談じゃねぇぞ畜生！」
黒須は教室の床に腰を下ろして足を投げだす。誰も彼の言葉には反応しない。まさしく、冗談ではない事態だった。
「びっくりした……人が殺されているよりも、学校から出られないよりも、今が一番びっくりした」
亜弥は深く溜息をつく。裏野はなぜか気温の低さ以外の寒気を感じていた。これは一体何なのか。
「う、裏野君。今が二〇一三年って本当なの？」
「本当、だと思うよ。少なくとも二〇〇一年のはずはない」
「ウソでしょ？　じゃあ担任の先生は？」
「阿藤先生」
「アトちゃん？　世界史だよね？　私知ってるよ。『俺はまだ二十代なんだぞ』が口癖の……」
「阿藤先生、『俺も来年は四十二の厄年だ』ってぼやいていた」
「……アトちゃん、A組の担任じゃなかった。校長先生は？」

「瀬野……瀬野五朗だったかな、校長は」
「違う、そんな名前じゃなかった。音楽の先生は？」
「音楽は……パパドポロス先生」
「何それ？　あだ名？」
「本名だよ。ギリシャ人の名前らしい。みんなからはパパ先生って呼ばれている」
「ギリシャ人……そんな人、知らない」
「裏野よぉ……」
黒須は鋭い目を向ける。
「体育のラオウ、お前の所じゃもうくたばったか？　肝臓壊してたけどよ」
「聞いたこともない。うちの体育の先生、女だし」
「もうガッコにいないのか……酒、ちゃんとやめやがったのかな」
黒須は目を伏せ、床に向かって話す。
「……やかましくてすぐに殴ってくる野郎だけどよ、本当は俺、そんなに嫌いじゃねぇんだよ。腹据わってるし、他の奴らよりはよっぽどセンコーらしい。分かるか？」
「……分からない。俺の所じゃ、生徒に手を上げる先生なんて一人もいないから」
裏野は冷静に返す。二十五年も前の庵谷校生。彼とはどこか、日常そのものが違っているように



感じられた。
「あ、あの……それじゃあどうすればいいんでしょうか、私たち」
紗耶香が青ざめた顔のまま話を戻す。
「ここは一体、どこなんでしょうか。庵谷高校だけど、庵谷高校じゃないんでしょうか」
「やっぱり、別の世界なんだと思う。だから先生も見当たらないし、学校から出られないのかもしれない」
裏野は答えにならない答えを返す。あの奇妙で壮大な透明の壁も、現実のものではないとすれば受け入れられそうな気がした。
「……でも、じゃあどうすればここから出られるんだ？」
「そもそも、どうやって私たちはここへ来たの？」
亜弥は尋ねるように裏野を見る。
「私、直前に何があったのかはまだ思いだせないけど、それまでに何かあった覚えもないよ。いたって普通の毎日を送っていたと思うんだけど」
「俺だってそうだ。その上、俺たちは別々の時代から来ている。いや、集められたのかもしれない。誰かが、どうにかして……」
「どうなってんだよ、裏野。二〇一三年にはそんなもんまであるってのかよ」

黒須が不機嫌そうに言う。裏野は即座に首を振って否定した。こんなおかしな事態を引き起こす方法などあるはずがない。しかしさらに後の時代、たとえば二一〇〇年にでもなればあるかもしれない。一体何をどうすればいいのか。黒板上の時計は午後四時を回っている。この時間は、どの時代で流れているのだろうか。

その時、校舎のどこかから女の悲鳴が聞こえた。

鳶のように高く長い声に四人の動きが止まった。

「……何の声、今の」

亜弥が三人を見回して尋ねる。

「悲鳴じゃなかったか？　下の方から……一階に誰かいるのか？」

裏野は小声で返す。その後も悲鳴は断続的に聞こえ、さらに激しい足音も響いていた。

「もう、やめて……」

紗耶香はうつむいて頭を振る。裏野と亜弥が沈黙していると、黒須が険しい表情のまま腰を上げた。

「……時代だとか、ガッコがどうとかなんて、どうでもいい。敵を捜して捕まえることに変わりはねぇんだ」

黒須は独り言のようにそうつぶやくと、煩わしそうな態度で教室を出る。思わず裏野が声をかけた。

「見に行くつもりか、黒須」



立ち読みサンプル
はここまで

「じっとしててもしょうがねぇだろ。隠れているなら好きにしろ」

時代の違う者たちをどこまで信用できるだろうか。それでも残された三人は互いにうなずき合うと、席を立ってガクランの背を追いかけた。

## 11

激しい悲鳴と物音は一階から聞こえてくる。四人は教室を出て階段を下りると、最初に黒須と出会った化学室とは反対側の廊下を歩きはじめた。校内が静かなだけあって、わずかな物音でもよく響く。先を行く黒須も普段より慎重な足取りで進んでいた。

「どこのバカがこんな真似してやがるんだ」

「落ち着いて行けよ。相手は屋上の男子を殺した奴かもしれない」

後に続く裏野は声をかけるが黒須からは返事もない。だが彼は廊下の角を曲がるなり、突然素早く体を引き戻した。

「な、何だ。いきなり止まるなよ」

裏野も思わず足を止める。亜弥の体が背中にぶつかったが、二人とも声を上げずに堪えた。